

地区住民検診における肺結核有病者の推移について

南 雲 清

結核予防会第一健康相談所（所長 渡辺 博）

受付 昭和32年9月18日

I 結 言

第2次大戦直後、日本では結核の蔓延著しく、昭和20年度の推定結核死亡は10万対282¹⁾という今までにない高い死亡率をしめすにいたつた。また疎開および帰郷によつて、都会の人口が農村および小都市に移動分散したため、地区住民の結核罹患状況の特殊性が失われ、該地区の結核有病率は著しく増加してきた。この事実は足立(茂)²⁾の戦時中における結核検診成績によつても明らかである。

群馬県渋川町（現在渋川市一人口約2万人）においても、同様適切な結核対策のないままに、多くの患者が不十分な自宅療養に、また無自覚のまま放置されていた。

昭和23年12月当健康相談所は結核患者の療養相談の依頼を受け、余りにも重症患者の多い事実にかんがみて、24年度より多くの不便をかえりみず、地区の住民検診を実施した。

以下昭和30年度までの8カ年にわたる結核検診により発見した有病者の推移の概要を報告し、批判を仰ぐ次第である。

II 各年度別の推移

1) 有病者数

(表1)。各年度に観察した有病者数は804名で、新発見した有病者は男252、女233計485名である。

表1 有 病 者 数

年 度	新発見者	旧有病者	計
23	28		28
24	78	9	87
25	61	27	88
26	72	45	117
27	62	56	118
28	58	69	127
29	36	51	87
30	90	62	152
合 計	485	319	804

2) 進展度、病勢別の推移

(図1・2)。23年度は特に重症患者を対象としたので、その差は著明であるが、24年度以降において、進展度では各年度の有意差なく、病勢別では、24年度と30年度に有意差を認める。

図1 進展度別の推移

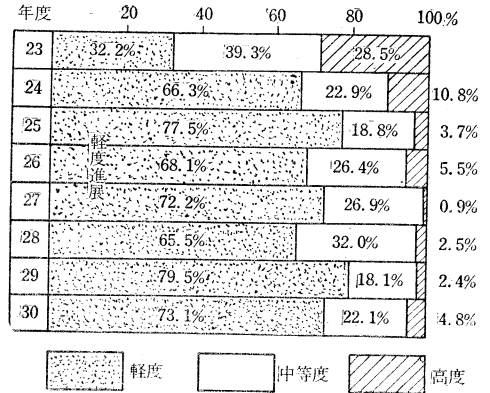
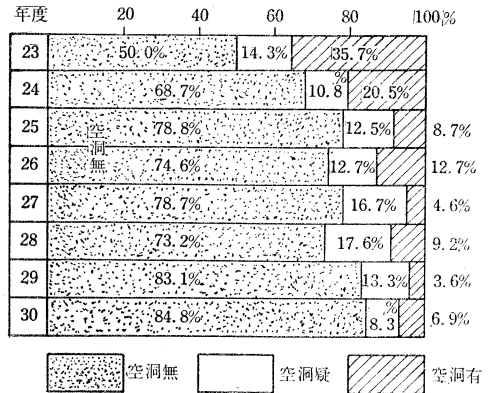


図2 病勢別の推移



3) 病型別の推移

(図3)。初期結核型は、24年度約25%より年々減少しており、浸潤型は22~36%のあいだにあつて増減し、著明な差を認めない。肺癆混合型も23年度は約36%と多いが、24年度以降は15%前後で変動は少ない。これにたいし、結節硬化型は24年度10.4%より30年度約45%に増加している。加療変形型は27年度が頂点となつて約24%を

しめし、その前後は減少の傾向をみせている。

図3 病型別の推移

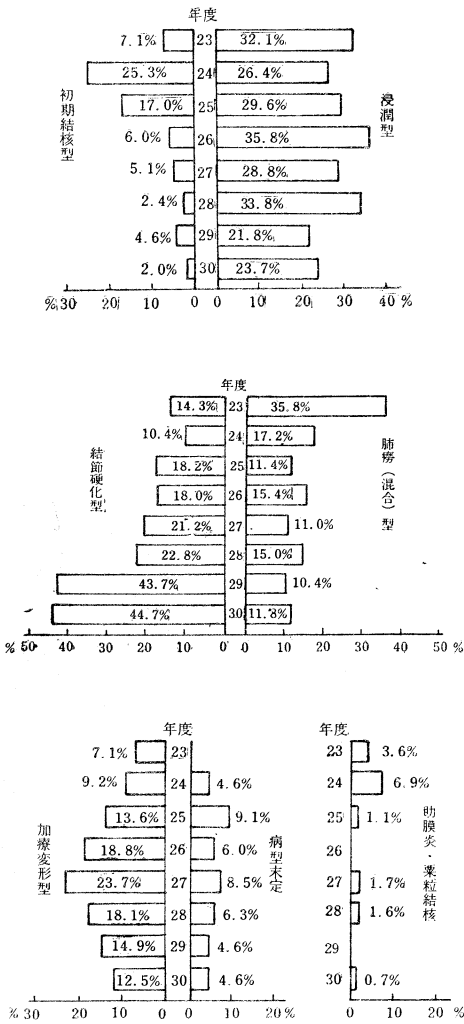


図4 適応医療の推移

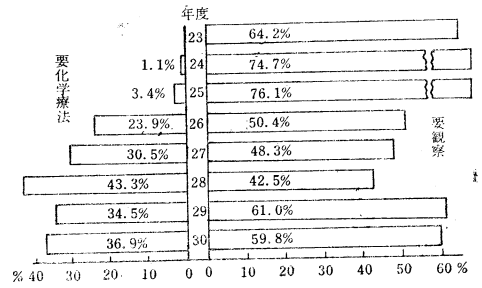
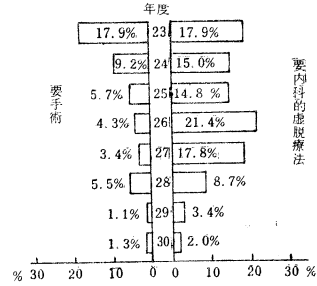
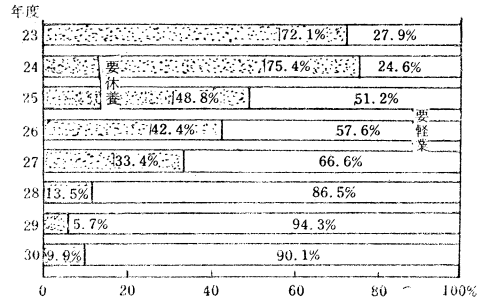


図5 要観察の内容



4) 適応医療の推移

(図4)。「要手術」の患者は23年度約18%あつたが、30年度には1.3%に減少し、「要内科的虚脱療法」も27年度までは20%前後より、28年度からは急速に減少している。これと対照的に、「要化学療法」は26年度より示指され、28年度に約43%と最高となつているが、29、30年度には35%前後に減少している。「要観察」は43~75%のあいだに増減しているが、この内容を見ると、図5のごとく、「要休養」のものが毎年著明に減少し、「要軽業」のものが増加している。これは最近「要観察」には軽症者の多いことを示し、昔日の「要観察」すなわち「絶対安静」の意味と全く異なつてしまつたことを物語るものである。

III 有病者の経過について

1) 観察有病者の数・病型

(表2・3)。経過を観察しえた有病者は男116, 女114, 計230名で、検診にて発見した患者の約58%である。その病型は、浸潤型が最も多くて84名, 他病型は34~40名である。

2) 全体および性別の経過

(図6)。全体の改善度(軽快, 略治)は約50%であり, 男女別では男の悪化, 死亡が多く, 不変が減少し, 結果的には男の経過は女より不良である。

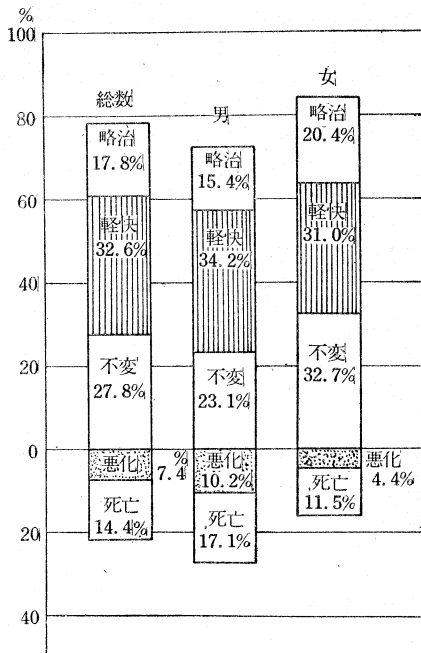
表2 発見年度別の観察有病者数

発見年度	23	24	25	26	27	28	29	計	
発見有病者	28	78	61	72	62	58	36	395	
観察	男	9	28	20	24	15	13	7	116
	女	14	27	19	21	15	8	10	114
有病者	計	23	55	39	45	30	21	17	230
%	82.1	70.5	65.9	62.5	48.4	36.2	47.2	58.2	

表3 病型別の観察有病者数

病型 有病者	病型					計
	初期結核型	浸潤型	結節硬化型	肺癆型	加療変形・他	
発見有病者	51	141	64	53	86	395
観察有病者	40	84	34	37	35	230
%	78.5	59.5	53.2	69.8	40.7	58.2

図6 全体および性別の経過



3) 進展度・病勢別の経過

(図7・8)。両者ともおのおの経過は類似しているが、「高度進展」に死亡が著しく多く、「空洞有」の死亡と軽快は半々である。しかしいずれも、不変と悪化が少なく、重症者は、死亡か軽快かいずれかの経過をたどらなければならなかつた事実が示されている。

図7 進展度の経過

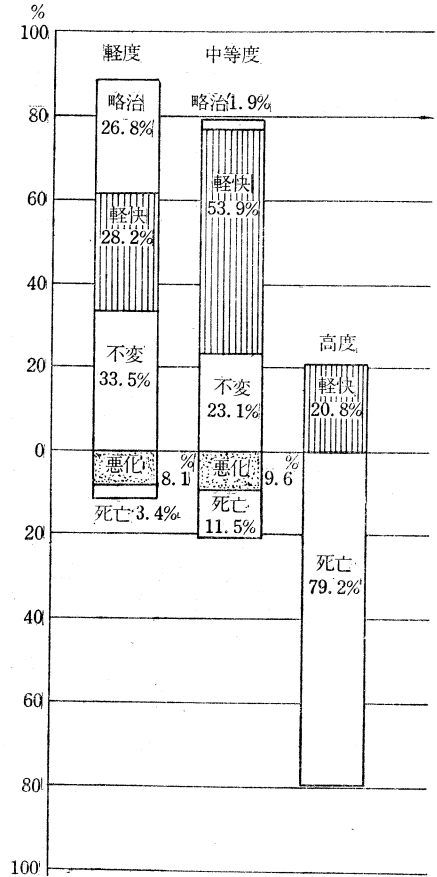
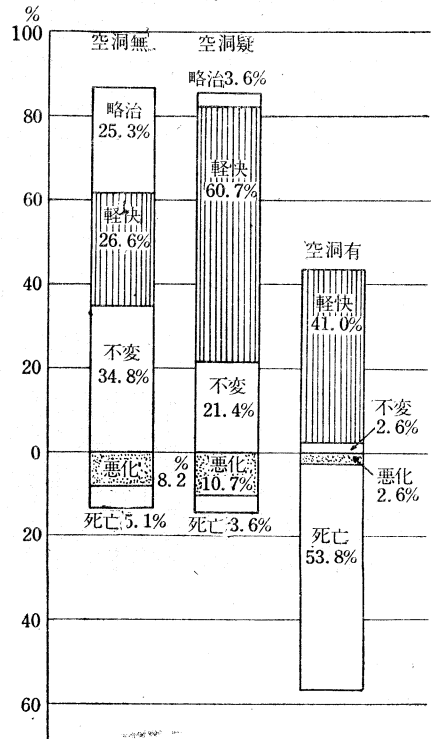


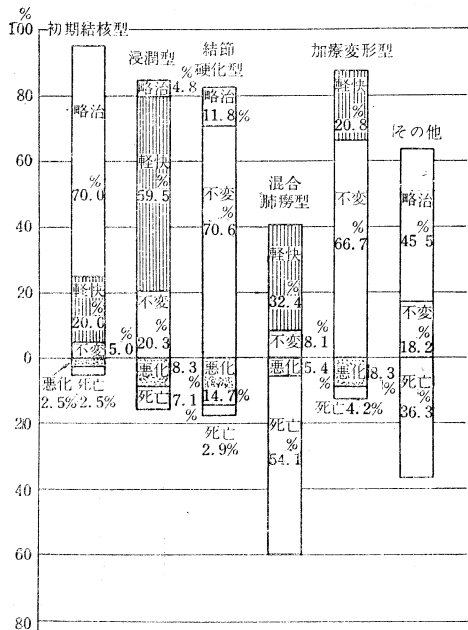
図8 病勢別の経過



4) 病型別の経過

(図9)。初期結核型と浸潤型の経過は良好であり，結節硬化型と加療変形型に不変が多い。肺癆混合型は予後不良であるが，約32%は軽快している。

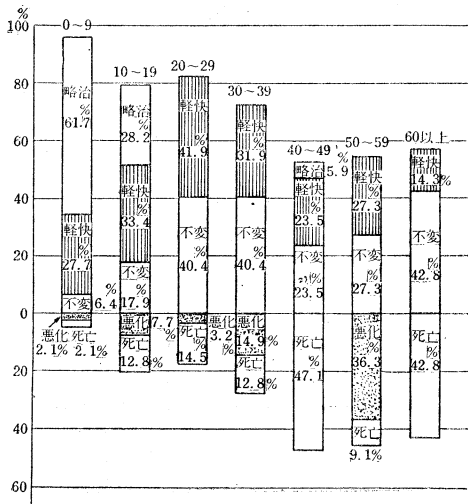
図9 病型別の経過



5) 年齢階級別の経過

(図10)。0~19才は経過著しく良好であり，20~39才は軽快と不変がおおの40%前後である。40才以上の経過は余り良好でなく，死亡また悪化がそれぞれ45%前後みられる。また軽快率も年齢を増すごとに減少しているが，これは40才以上に重症患者が多いためであった。

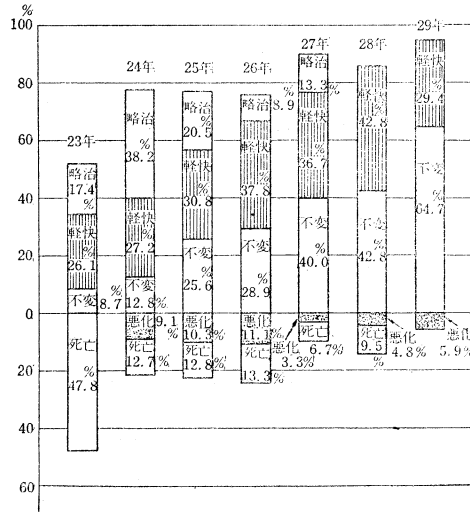
図10 年齢階級別の経過



6) 発見年度別の経過

(図11)。23年度に発見した患者の死亡は約48%あるが，これは重症者が多かったためであった。しかし24年度以降の発見患者は，発見年度が古いほど，経過は良好であり，結核治療法が進歩した最近においても，経過は著しい変動を示しておらない。この原因として，結核管理の影響も関与するものと考えてさしつかえないであろう。

図11 発見年度別の経過



IV 考案ならびに結語

戦後8カ年にわたり結核検診をおこなうと同時に，発見した患者については，毎年結核管理をやつてきたのであるが，発見患者を100%毎年管理することは困難であった。しかし，管理しえた患者について，その推移状況を考察すると，年々その変遷が明らかとなり，結核検診がいかに大切であるかを痛感した次第である。その大要は次のごとくである。

- 1) 初期結核型が減少し，結節硬化型の増加が著明である。肺癆混合型も10%程度はまだ残っている。
- 2) 「要化学療法」のものは最近で35%前後みられる。
- 3) 全体で50%前後の改善度がみられるが，男は女に比べ，予後不良である。
- 4) 重症患者は，軽快か死亡かいずれかの運命にあつた。
- 5) 年齢を増すごとに経過は不良である。
- 6) 24年度に発見された患者の経過が最も良好であつた。
- 7) 毎年くりかえし検診することにより，より多くの軽症者の発見が可能となつてきた。これは結核治療法の発達により最も理想とする早期発見，早期治療の実現に

拍車をかけるものとする。

文 献

稿をおわるにあたり、御指導御校閲をいただいた、結核予防会結核研究所長隈部英雄先生、同研究部長岩崎龍郎先生、同第一健康相談所長渡辺博先生に衷心より感謝の意を表します。

- 1) 岡西順二郎：結核死亡の推移，日結，13：692，昭29.
- 2) 足立茂：医学と民生，4：120，昭21.